

教会暦と聖書の流れ

ファリサイ派・律法学者と「汚(けが)れ」について論じ合った先週の福音(マルコ 7・1-23)の後、イエスはティルスという異邦人の地に行きます。そこで異邦人の女と出会い、彼女の娘をいやしますが、同じ話は A 年にマタイ福音書から読まれる(マタイ 15・21-28)ので、ここでは省略されているようです。イエスに対して批判的なファリサイ派・律法学者の姿と、イエスに出会い、イエスによって信頼と希望を取り戻していく異邦人・障害者・貧しい人々の姿が対比されていく中で、マルコ福音書は前半の頂点とも言えるペトロの信仰告白(8・29)へと向かっていきます。その中できょうのいやしの物語が伝えられています。

福音のヒント

(1) 「ティルス」はガリラヤ地方より北の地中海に面した町で、「シドン」はそれよりもさらに北にあります。「デカポリス地方」はガリラヤの南東に位置していますから、マルコの描くイエスの行程には少し無理があります。挙げられている地名はいずれも異邦人の土地ですから、マルコはガリラヤを中心にしたイエスの広い活動地域を示そうとしているだけかもしれません。ただし、マルコ 7・24には「イエスはそこを立ち去って、ティルスの地方に行かれた。ある家に入り、だれにも知られたくないと思っておられた」とありますから、積極的に神の国の福音を告げるために異邦人の地に向かった、とは考えにくいでしょう。なぜイエスがこれらの地方に行かれたのかはよく分かり

ません。なにせよ、ここでイエスは再びガリラヤ湖に戻ってきました。これはガリラヤ湖東岸のデカポリス地方(異邦人の土地)のことでしょうか。それとも北西岸のガリラヤ地方(ユダヤ人の土地)のことでしょうか。どちらとも取れますが、きょうの話は特に異邦人の間で起こった話だと考える必要もなさそうです。

(2) この箇所ではイエスは自ら病人を見つけ出していやすのではなく、人々が病人をイエスのもとに連れてきていやしを願います。これは多くのいやしの物語に共通していることです。またここで「イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し」(33節)とあります。さらに「イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけぬ、と口止めをされた」(36節)とも言われています。イエスは治癒の奇跡を人に見せびらかして名声を得ようとはせず、むしろこのような奇跡によって自分を理解されたくないと考えているようです。

34節の「深く息をつき」はイエスの心の激しい動きを表していますが、ローマ 8・23,24 では「うめく」と訳されている言葉です。これは苦しみの中で救いを求めて叫ぶことです。だとすると、イエスが目の前の人の苦しみに深く共感し、その人のうめきと一つになって



自分もうめくところからいやしが起こるのだと言えるかもしれません。イエスが行なった数々の「いやし」はすべてこのようなことだと考えてもよいのではないのでしょうか。

(3) 33節「指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた」は民間に伝わるいやしの物語によく見られる動作だったようです。ここで特徴的なのは「エツファタ」というイエスの言葉でしょう。イエスの言葉がアラム語のまま伝えられている箇所は他にもありました。たとえば、マルコ5・41の「タリタ・クム(少女よ、起きなさい)」です。おそらく聞いていた人々の耳に強烈に残る声であり、響きであったので、これらの言葉はアラム語のまま伝えられたのでしょうか。マルコはこれらの言葉を、現実に働きかけて現実を変える、神の子の力ある言葉として伝えています。

イエスは聞こえない耳に向かって「エツファタ」と呼びかけました。他の人々は「この人の耳はどうせ聞こえない」と思っていたのですが、イエスは、自分の語りかけが必ずこの人に届くという信頼と希望をもって語りかけるのです。このイエスの信頼と希望がこの人に伝わり、この人は変えられていったとも言えるのではないのでしょうか。わたしたちは、このようなイエスの力強い呼びかけを聞くことができるのでしょうか。

(4) 37節「この方のなされたことはすべて、すばらしい」という群衆の反応は、創世記1・31「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」を思い出させるかもしれません。これは神の天地創造の業(わざ)の結びにある言葉です。「耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる」は、イザヤ35・5-6「そのとき、見えない人の目が開き / 聞こえない人の耳が開く。そのとき / 歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う」が背景にあるようです。こちらは神の救いが実現する時の有り様を語る預言者の言葉です。マルコは群衆の口をとおして、神の創造と救いの業(わざ)が、神の子であるイエスの上に実現しているということを伝えようとしているのでしょうか。

(5) きょうの話と8章の盲人のいやしの話はマルコ福音書だけが伝える話です。マタイやルカはこのような素朴ないやしの物語に興味を示さなかったのかもしれませんが、マルコはこれらの話を大切に伝えようとします。マルコの文脈をよく見ると、これらの話は特別な意味があるようにも思えます。次のようなつながりを見てみましょう。

7・31-37 耳の聞こえない人のいやしの物語。

8・18 「目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか」という言葉。

8・22-26 目の見えない人のいやしの物語。

そしてこの直後に、8・27-29のペトロの信仰告白「あなたはメシア(キリスト)です」があります(次週の福音)。このように見ると、2つのいやしの物語は単に肉体的ないやしがテーマであるというよりも、イエスについての理解・悟りを表す象徴的な意味を持っているのではないかと考えられます。弟子たちもこの人々のようにイエスに触れて心の目と耳が開かれていかなければ、イエスのことを本当に理解することはできない、とも言えますし、これらの箇所ではいやされた人の中に、イエスを知るといふ、弟子のあるべき姿が示されている、とも言えるでしょう。わたしたちはどうでしょうか？